第67回分析化学討論会（2006年，秋田）

第67回分析化学討論会は，東北支部の担当で，2006年5月13日（土）と14日（日）の両日，秋田大学手形キャンパスにおいて開催された。

秋田大学は，1910年に創設された秋田鉱山専門学校（採鉱学科と冶金学科の2学科制）から出発し，1949年に4年制の秋田大学（学芸学部と鉱山学部）となり，1967年に学芸学部は教育学部となり，1970年に医学部が新設され，現在の3学部の体制になった。その後，1998年には，鉱山学部が工学資源学部に，教育学部が教育文化学部に改組再編され，2004年からは，国立大学法人秋田大学となった。

討論会実行委員会は，秋田県内に在籍する14名を中心に支部役員を含む60名で組織され，準備に当たった。昨年，一昨年の沖縄，北見が盛会であっただけに，参加者の大幅な減少を危惧（きぐ）したが，余計な心配であった。参加者は763名｛予約登録者546名，当日登録者217名，登録免除者14名（外数）｝を数え昨年の736名を上回った。講演件数は，昨年の478件には及ばないものの，447件（依頼講演17件，シンポジウム講演4件，主題講演42件，主題若手講演16件，一般講演204件，ポスター発表108件，若手ポスター発表50件，テクノレビュー6件）に達した。

本討論会では，あらかじめ設定した四つの主題と一つのシンポジウムを中心に討論がなされた。

1. 生活環境・資源と分析化学（オーガナイザー：斎藤紘一，東北大；小川信明，秋田大工学資源）｛依頼講演4件，主題講演16件（内若手主題講演2件）｝

自然環境の動態調査，資源と環境問題のかかわりなど，広い意味での環境問題における分析化学的手法や研究が果たしてきた役割について討論した。依頼講演として，以下の4名の先生方にご講演をしていただいた：1. 世界遺産白神山地での大気環境測定（斉藤勝美，秋田県環技センター），2. 酸性環境問題とアルミニウムのスペシエーション分析（角田欣一，群馬大工），3. 資源環境学分野における化学分析―元素の濃縮・分散過程の解明（水田敏夫，秋田大工学資源），4. 資源リサイクルと分析化学（藤田豊久，東大院工）。この依頼講演4件については，一般市民にも無料で開放したが，20名ほどの記帳があった。記帳者以外にも多くの参加者が見られ，秋田大学長も聴講され，新聞社（秋田魁新報，読売新聞）の取材もあり，さらに学会員も大勢入場され，立ち見が出る盛会であった。学会参加者ならびに，市民の環境問題に対する関心の高さが窺（うかが）われた。

2. 生命科学と分析化学（オーガナイザー：安斉順一，東北大院薬；村本光二，東北大院生命科学；赤坂利昭，東北大院生命科学；眞野成康，東北大院薬）｛依頼講演4件，主題講演16件（うち若手主題講演4件）｝

安全で健康な生活を営むというすべての人の願いを実現するために，分析化学がどのように貢献できるのかという視点から，「安全と健康」に関わる問題を討論した。依頼講演として，以下4名の先生方にご講演をいただいた：1. 生物化学兵器テロにおける現場見地について（瀬戸康雄，科警研），2. 食べ方を分析する―樹よりも山を見る （鈴木建夫，宮城大食産業），3. 食品の新機能発掘のための分析手法開拓（宮澤陽夫，東北大院農），4. 健康食品素材の開発－セサミンとアラキドン酸（木曽良信，サントリー健康科学研）。

3. 分離化学とセンシング（オーガナイザー：斎藤紘一，東北大；大関邦夫，弘前大理工；星野仁，東北大院環境科学）｛依頼講演4件，主題講演11件（うち若手主題講演4件）｝

機能性分離膜，機能性固相抽出剤，センシングプローブ，選択的抽出，形態別分離，分離と計測の一体化など，分離とセンシングの新しい方法論を目指した視点で討論した。依頼講演として，以下の4名の先生方にご講演をしていただいた：1. 環境化学における状態別分析（高久雄一，環境科学技研），2. アドミセルを用いる物質分離系 （平出正孝，名大院工），3. チアカリックスアレーンを用いる分離，センシング（壹岐伸彦，東北大院環境），4. 新しい分離計測系（中村　洋，東理大薬）。なお，この討論主題の内容は「分析化学」誌で特集される。

秋田大学正門

主題講演会場

4. 計測科学の新展開（オーガナイザー：我妻和明，東北大金属材料研；尾形健明，山形大工；井原忠雄，イハラ理研）｛依頼講演5件，主題講演15件（うち若手主題講演6件）｝

工業分析において計測技術の果たす役割はきわめて大きく，現場要求に応えるため，様々な装置開発が行われてきたが，本主題では，産業界からの視点に立ち，計測科学やその将来について討論した。依頼講演として，以下の5名の先生方にご講演をいただいた：1. グロー放電発光分析法による有害微量元素の迅速分析（安原久雄，JFEスチールスチール研；我妻和明，東北大金研），2. レーザーアブレーションICP発光分光分析法による鉄鋼迅速分析への応用 （石橋耀一，JFEテクノリサーチ），3. 最先端レーザー計測技術の実フィールドへの応用（出口祥啓，三菱重工先進技術研セ），4. ガスモニタリングによる反応の解析と実機プロセスへの適用（西藤将之；藤岡裕二；齋藤公児，新日鉄先端研）。5. 電気電子製品に関する環境計測技術の動向（竹中みゆき，東芝研究開発セ）。なお，この討論主題の内容は本誌で特集される。

5. シンポジウム－バイオチップ，デバイス研究・開発の最前線（オーガナイザー：末永智一，東北大院環境科学）（シンポジウム講演4件）

バイオチップやバイオデバイスが，新たなビジネスを構築す

ポスター会場

懇親会会場

るという戦略に基づく企業の開発担当者による依頼講演を行い，取り組みの最前線を紹介するとともに，研究・開発について討論した。シンポジウム講演（依頼講演）として，以下の4名の先生方にご講演をいただいた：1. SPR イメージングに用いるためのアレイ作成技術(稲森和紀，東洋紡敦賀バイオ研)，2. 高速小型全自動2次元電気泳動装置の開発（鵜沼豊，シャープバイオセンシング研），3. 電気化学 DNA チップとその応用（橋本幸二，東芝研究開発セ），4. ヘルスケア分野への応用を目指したバイオセンシング技術の開発（杉原宏和，松下電器ナノテク研)。

おおむね30歳以下の研究者を対象とする「次世代を担う若手分析化学者講演」（企画：若手交流会東北支部）が昨年に引き続き開催された。本討論会では，4つの討論主題と連動させて講演（若手主題講演）を募集し，また，新しく「若手ポスター講演部門」を設けた。若手主題講演として16件の研究発表があり，各題講演会場にて活発な討論が行われた。

「若手フォーラム in 秋田」（オーガナイザー：西澤精一，東北大院理；水口仁志，山形大工；藤原一彦，秋田大工学資源）は，討論会第2日（5月14日）午後4時30分より，秋田温泉さとみに会場を移して開催された（詳しくは別に報告)。

本討論会の口頭発表会場には一般教育棟1号館と2号館の教室（A～H 会場）を使用し，ポスター発表と機器展示は，口頭発表の会場とは若干離れた（歩いて5分）ベンチャービジネスラボラトリ棟・総合研究棟2階の2教室で行った。このポスター会場は，大学内でのポスター発表に良く使用されており，前日のボードの搬入や機器展示のブースの設置および当日のポスター発表の準備も問題なく行えた。

懇親会は，秋田市の駅前にある「ホテルメトロポリタン秋田」の大広間（350名収容）を利用して行われた。参加者は251名（招待者を除く）であった。この懇親会に先立ち，アトラクションとして，ホテルの屋上で，秋田の夏祭りである「竿灯」の実演があり，小雨の中，大勢の見物者（一般の宿泊客も見物にこられていたようです）が集まり，小雨で風も強かったので，提灯への火入れはなかったものの，50キロもある竿灯の演技は参加者の目を奪っていたようであった。懇親会そのものは，小川信明実行委員長の歓迎の挨拶に始まり，小泉英明日本分析化学会会長の挨拶があり，来賓の三浦　亮秋田大学学長からご挨拶をいただいた。また，招待を予定していた佐竹敬久秋田市長が急用で欠席されたため祝辞が紹介された。その後，各支部長による鏡割りが行われ，乾杯の音頭は四ツ柳隆夫　宮城高専校長によってなされた。しばらく歓談した後，2005年「分析化学」論文賞（代表：内山一美，首都大学東京）と会員拡充の表彰が行われた。最後に，北森武彦（東大院工）東京コンファレンス実行委員長，渡會　仁（阪大院理）第55年会実行委員長，深見元弘（宇都宮大農）第68回分析化学討論会実行委員長にご挨拶をいただいて閉会とした。

実行委員会では，懇親会で秋田の食とお酒を堪能していただけるよう，目一杯用意したつもりであった。しかしながら，宴会が終了するころには，ほとんどの料理と日本酒がなくなっており，物足りなかったのかとも心配したが，後で参加者にお聞きしたところでは，十分に満足された様子であった。また，料理人が中に入って，料理を取り分けながら，料理の説明をするようなスタイルが好評のようであった。さらに，美の国秋田を広報するミス観光秋田の方々に，「秋田フキ」を収穫するときの伝統的な格好をして会場に入ってもらい，その説明などを適宜していただいたが，彼女たちと写真に納まられた先生も大勢おられたようである。

討論会の運営に欠かせない学生アルバイトは，秋田大学工学資源学部と教育文化学部の大学院生を中心に，前日から延べ106名採用し，本部，口頭発表会場，ポスター会場，受付，クローク，休憩室，懇親会，会場設営に，それぞれ責任者を配置した。実行委員の指示に従い，大きなトラブルもなく業務をこなした。参加者の先生方からは，「アルバイトの学生さんが良く動いていて，気持ちよく発表できた」とのお言葉をいただいた。昨年の年会（名大）から，パソコンを使用した発表形式になっている。あらかじめ会場でのコンピュータの操作等についてアルバイトの訓練を行ったことが，スムーズな運営につながったといえる。

会期中の天気を予報で見ていると，初日が降雨となっていたが，発表時間にはほとんど降らなかったので，移動等に大きな混乱はなかった。また，エクスカーションは特に企画しなかったが，約100年間に収蔵された鉱物中心の学術的価値の高い資料が約4000点展示されていて，その内容を世界に誇れる秋田大学工学資源学部附属鉱業博物館を，学会登録者に限り，会期中に，無料で開放してもらった。会期中に討論の合間を見つけ，多くの方々が見学されたようである。その中の何人かに，「大変興味深い資料満載で，すばらしい博物館ですね。」とのお言葉を頂き，実行委員会一同，秋田で討論会を開催した意義もあったものと，大変喜んだ次第である。

今は，討論会を無事大過なく終了することができてほっとしているところである。とはいえ，至らぬところは多々あったと思うが，実行委員会の努力に免じて，ご容赦願えたら幸いである。

本討論会を開催するにあたり，多くの方々からご支援とご協力を賜りました。昨年の北見の大会及び昨年の名古屋の年会の運営マニュアルが大変役立ちました。前実行委員長の板橋　豊先生（北大院水産科学）と原口紘炁先生（名大院工）にお礼申し上げます。会場となった秋田大学からは，駐車場も開放していただき，博物館を無料開放していただくなど討論会が滞りなく進行するよう全面的なご協力をいただきました。秋田市・秋田県からは，㈶秋田コンベンション協会を通じて，パンフレット・タクシーステッカーの提供などで支援していただきました。また，日本分析化学会本部事務局，オンライン登録委員会，広報委員会には，一方ならぬお世話になりました。広告の掲載，機器展示でご協力いただいた企業各社にも感謝いたします。そして何より，秋田にお越しいただいた全参加者の皆様に深く感謝申し上げます。

次回の第68回分析化学討論会は，宇都宮で開催されます。「おもてなし日本一」を目指す（宇都宮観光コンベンション協会の HP）宇都宮の餃子に誘われて，多くの参加者がありますことは間違いないと思います。深見元弘先生はじめ次回実行委員の方々にエールを送ります。

〔秋田大学工学資源学部　小川信明〕